

指定討論2

田垣正晋
(大阪府立大学)

私自身は、大学院生時代を含めると、身体障害の方のナラティブ・ストーリー、ライフ・ストーリーの研究をずっとしてきまして。マスターから始めて15～16年になりますが、まだこのへんのをちゃんと整理していないなと思いつつながら、今日は3人の皆さんのご発表を聞かせていただきました。

総論的な感想を申し上げたいと思いますが、ナラティブというのは、皆さん共通しておられるのは「点」、ポイントであったものを、「面」、プロセスとして見ることだというのは、多分、共通していると思います。点であったものを思い切り、積分してみるようなものかなとも思いました。それに関係して、まさに山田先生がおっしゃったような、ナラティブの複数性・時間性的話、特にこのテーマが適応される、問題になるのが廣瀬先生と山田先生の研究だと思います。この話はよくリテリング、語り直しということで京都大学のやまだようこ先生がおっしゃっていた話だと思います。語り手が複数回話す、そこで語っていくものは微妙に変わっていくわけです。語りは常にアップデートしていますから、それを本来、たった一つの平面、たった一つのものに落としこむのは、本来は無理なわけです。今日の山田先生の開発された供述分析のKTH CUBEシステム、ソフトウェアのような立体的なもの。あるいはTEMとか、TLMGになるのだらうと思いますが。その意味ではお二人のご発表についてなるほどと思って聴かせていただきました。

廣瀬先生に質問ですが、2回のインタビューで微妙に変わっているだろう内容をTLMGプロセスの図に落としこんでいる。その際、2回のインタビューに全部入れこまれたのか、あるいは実は1回目、2回目というふうに分けられたのか。

さらに総論的なコメントですが、語られた中身、コンテンツをベタにするのか、語りをフォーマティブなものとして「語り方」としてみるのか、なぜそのような語りするのか、なぜそのような語りをしてしまわざるをえないのか。山田さんのご研究は、それが先鋭化するテーマを扱っておられて、かつ先鋭化す

る仕組みも3次元でやろうと。廣瀬先生のご研究の場合、なぜこういう語り方をしなければならないのか。今、発達障害ブームという用語弊があるかと思いますが、発達障害はトレンドなんです。もしかすると発達障害がマスコミを含めて、学校教育現場を含めて、そういう社会文化的な力、社会的な圧力が働くということを踏まえると、こういう語り方をしてしまう何かがあるのか。言い換えるとどのように語った、どのような中身を語ったかということより、なぜこういう語りをしたのかという議論がもう少し必要ではないかなと。VTM、価値が変わったというところで、これももしかすると1つの出来事でブレークスルーが起きたという、これまた1つの語り方なんです。われわれが何か1つ、2つの出来事で劇的に何か起きたという、われわれがもしかするとこういう語り方がよい、こういう語り方をしてしまうのかもしれない。逆にいうと、そうじゃない、何が原因かははっきりしないけど、だんだんこうなってきたとか。病気や中途障害を研究していると何かでブレークスルーが起きたということが非常によくあるんですね。社会学というエピファニーとか、TEMの前は転機という研究がありましたが、そういうことにつながるのだと思います。

福田さんのご研究で、うちの学部生は最近、ゼミでは尺度をつくって、障害者の人と交流していても有意な差がみられないという研究が出てきました。僕はあまのじゃくで量的研究をさせているんですが、実はアウトカムとか数値、メジャメント、インデックスで計った数値というもの、ナラティブとセットだと思うんです。文字を見るとインクのシミと思わずに、ひらがなの「あ」と思うとか、田垣の「田」という漢字で「お米ができる」と認識するのと同じで。数字を見ると、どういう意味かを考える。これは必ずセットなんです。森岡先生がナラティブを、単に客観性の話にしておくと面白くないとおっしゃいましたが、われわれはアウトカム、数値が出てきて、その数値を前提としてナラティブを研究するというより、数値とナラティブは一心同体、表裏一体みたいなものではないかなとも思います。たとえばQOLにしろ、Indexが前回と比べてよくなりました。ちゃん、ちゃんと終わりますと。終わらないですね、絶対に。めでたし、めでたしで終わらないですね。常に何らかの次の何かが展開してく。Indexは未来展望的ナラティブ、語りを必ず生み出すものだと思います。社会問題の構築主義と少し共通するかもしれませんが。

福田さんに事前にシナリオをお話ししていたんですが、Indexを見てすぐ

思ったのは、国際生活機能分類、WHO がつくっている ICF との関連性をすぐには思いませんでした。広い意味での社会生活分野のインデックスは、障害者分野ではまだまだなんです。別の大学の先生たちとナラティブをテキスト・マイニングにして、それを ICF に落としている。質的に全然違う研究を工学系の人と考えているんですが、WHO がつくったものは、医療系、リハビリテーション系等々の話になってしまいますので、福田さんの分野の領域は、もっともっと頑張ってもらいたいと思います。

あと、タイトルは「主体性」というより「報告型アウトカム」の方がいいのではないかなあと僕は思ったりしています。主体性の尊重といいながら実は専門職の都合でいうことがありますから、患者さんが話したという意味で、患者報告型アウトカムの方がしっくりくるなと思いました。